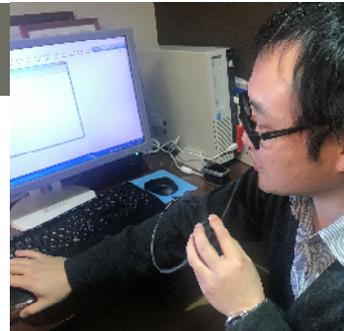


ICT を積極的に活用している、宮崎県の特別養護老人ホームほほえみの園を見学させていただきました！最先端の実践現場をご紹介します

記録は PC かスマホで 音声入力やフリック入力を活用

マイクを使った音声入力がメイン。コンピューターがその人の声を学習するため、使えば使うほど性能は上がり、ボソボソと喋っても聞き取ることができるようになる。職員に話を伺ったが、コンピューターに慣れていない職員でも、「書くより早い」と仰っていたのが印象に残った。スマホ世代はフリック入力の方が早いとのこと。



ベッドにセンサーマット

ベッドマットの下に敷いたセンサーで、体動（寝返り、呼吸、心拍など）を測定する。その方が、「睡眠」「覚醒」「起き上がり」「離床」のどの状態にあるか、詰所のモニターで絵と色で分かりやすく見ることができる。長期間のデータを見ることで、睡眠の質や、ベストなトイレ誘導のタイミングを見つけることもできる。



ケア・コミュニケーター 脳波から気持ちを読み取る

これはまだ研究協力の段階だが、入居者が装着することで、興味度、好き度、集中度、ストレス度、眠気度を測定することができる。例えば、意思の伝達が難しい入居者の食事が進まないとき、スプーンの形状をいくつか変えてみたところ、木のスプーンに対して脳波の反応が良く、それを使って食事介助をしたところ食事が進んだ。



このほかにも、ケアプランの自動作成など、新しい技術の導入を積極的に行っていました。これらがうまくいく理由を考えてみました。

- ①導入することでどのような効果があるのか、スタッフにしっかり説明し、うまく使えるようになるまでフォローしている。
- ②スタッフからの新しい提案にも積極的に応じている（週1回の会議でプレゼンする機会があり、何度でもチャレンジできる）
- ③入居者にとってより心地よく過ごすことができる空間を作りたいという経営者の理念が浸透している（例：食事や入浴はそれぞれ入居者が希望する時間に行っている）。それらの基本姿勢がベースにある中で、センサーマットを利用することで、より利用者の状態に応じたケアができる、とスタッフも共感している。
- ④入居者の幸福とともに、働く人の幸福も追求している。